町民文芸

只見短歌会　令和三年七月詠草

老いわれを取り巻く人らの情けにて生きる意欲をなくさず過ごす　馬場　八智

花便り友に送れば里心老い増す程に深まると言ふ　目黒　富子

コロナ禍にワクチン接種施設にて集ひて互ひに黙視を交はす　関谷登美子

一周忌過ぎたる夫の衣類など嫁を頼みて整理をするも　渡部ゆき子

忙しさに好物の餌買へずしてこれで我慢ねと猫に謝る　新国由紀子

人並みに野菜作れど失敗しこの次こそはと畑土に問ふ　渡部ヨリ子

ひと月に一週間のショートステイ五年過ぎたり家族のごとし　新国　洋子

（出詠順）

只見俳句会　七月定例会

宇多喜代子　指導

草茂りあき家に一輪あじさい花　睦子

梅雨の朝畑のフルーツ姿消し　恒夫

敗戦の予告の父の終戦日

母はただ地下足袋のまま敗戦日　礼

参道は根方たよりの木下闇

筒鳥やここはお社ダムは奥　一穂

夏座敷全開にしておもちゃ山

エアコンや生後十日の寝息かな　修一

天に咲く母の遺せし花菖蒲

夏のれん満足顔の客二人

プレイボール声滝刺と球児の夏　信

夏雲や遠き昔の縦走路　都

先生の肩揺する様青時雨

球児等の声高々と梅雨晴間　真理子

濃き淡き白桃色にあやめかな

夏山に待つ子目指して鷲立ちぬ